

令和7年度 国語科実践・研究計画

部 員 ○工藤優花、鎌田佳佑、小室真紀

1 昨年度の成果と課題

昨年度の実践から、本校の国語科教育における自律した学習者の具体が見えてきた。

- ① 1年「オリジナルじどう車カードゲームであそぼう～じどう車しらべ～」の実践では、教材文を読み進めていくうちに、ある子どもから「自分が好きな自動車のことを調べたい」という声が上がった。この発言から、「好きな自動車のカードを作り、そのつくりとはたらきを並べて説明するゲームで遊ぶ」という学習のめあてが生まれた。

救急車を選んで調べた子どもは、はじめは明確な基準を設けずに並べていたが、ゲームによって友達との交流を行う中で、「その車が仕事をするのにより必要なつくりから順番に並べると説明がよく伝わる」ということを理解し、筆者の文章構成の意図を考えている姿が見られた。子どもたちにとって関心が高いカードゲームを言語活動に設定したことで、意欲をもって学習に取り組める場を設けることができたと考える。

子どもたちの活動に対する意欲を支えていたのは、「選んだ題材を追究することができ、成果物で遊びながら交流できること」という目的意識であったと考えられる。

- ② 5年「見つめよう 物語の中の『友達』」の実践で「にじの見える橋」を読んだ子どもは、「自分も友達や家族との関係がうまくいかず、もやもやしたことがあって、主人公の気持ちがわかる」と感想を述べ、人間関係に思い悩んだ時の自分の心情と、主人公の心情を重ねていた。登場人物の心情を自分なりに解釈し、本文の叙述を何度も読み返しながら、その根拠を一生懸命に探そうとしていた。

この単元では、子どもたちに「友達との出会い」や「すれ違い」をテーマとして集めた5つの物語文を提示した。その後、「心に残った物語を1つ選び、本文中に描かれていない登場人物の心情が分かるように物語をリライトする」という活動を行った。物語をリライトする場面では、共感を覚えた登場人物になり切りつつ、本文から読み取った登場人物の心情をありありと描き出そうとしている姿が見られた。

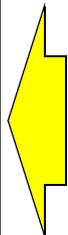
一方、本文をあまり読み返さずに、初めに読んだ時点の解釈で満足しているような子どもの姿も見られた。自身の解釈にこだわりをもち、さらに深く吟味していけるような場を設けられるようにしていきたい。

- ③ 6年「書きたい世界が広がる『作家の時間』」の実践では、説明文を書き進めているA児が、自分の作文を紹介しながら「逆接が3回並ぶのは変じゃないだろうか」と学級全体に悩みを投げかけた。様々な代案が挙がり、小グループに分かれてそれぞれの案を試していると、B児が「この文章では、逆接の後の文を強調したいんだよね。こんな表現に変えたらどう」と、代案を示した。他の子どもから拍手が起こる中、A児は「言いたいのは、確かに逆接の後なんだよなあ」とつぶやいた。後日A児は、B児の案を受け入れたことを学級みんなに伝えた。二人のやりとりをきっかけに、他の子どもたちは、「接続語によって、読み手が受ける印象が異なる」、「書き手でありつつ、読み手としても文を見直す必要がある」ということを感じた様子だった。

「他の表現はないだろうか」と反芻する問いかけや、友達からの問いかけ、友達とのやりとりから浮かび上がる自分への問いかけのように、それぞれの子どもたちに小さな問いかけが重なっていく場面があったことが、気づきを生み出し、書きながら何度も考え、再び考え直す創造的な学びの土台をつくることにつながっていたと考える。

2 国語科における自律した学習者の姿

- ① 自分に適した学びの道筋を選択し、進んで学びに向かいながら、言葉の力を高めている姿
② 根拠を基に自らの解釈や表現を吟味し、よりよいものにしていく姿
③ 問いの積み重ねを基に、言葉に関する選択・決定を省察する姿



3 授業デザインの具体的な取組

- 個々の子どもに応じた学習材の提示や学習展開の工夫ができるように、授業の内外で子どもの姿を的確に見取る。
○自らの解釈や表現に対して、その解釈・表現に至った根拠をもって学びに向かうことができるような学習活動の工夫をする。
○自身の振り返りや、仲間と関わって得たことを基に、自分の考えはどのように変わったのか、問い直す場を設ける。